

ストレプトマイシンを使用せる結核性髄膜炎の標本供覧

佐川一郎 (第1部)

次の如き組織標本を供覧した。

- 1) 「ス」40g使用し髄膜炎は治つたが衰弱で死亡した生後10カ月の小兒。
Gyr. temp. sup. 及び脳底髄膜には病的所見がない。
- 2) 「ス」を使用せぬ場合は穹隆部の髄膜の変化は強いが「ス」を使用した例は軽い。
- 3) 神経細胞は「ス」使用例では変化が軽いが使用しない時は重篤である。
- 4) 脳底髄膜は「ス」使用の有無に拘わらず強く犯されている。
使用例で滲出性細胞が脳実質内へ没入している像。
- 5) 「ス」使用せざる例で延髄に結核結節がある。臨床的に脳炎様の症状を呈す。
- 6) 「ス」使用例で脳橋に髄膜とは無関係に孤立結節ある像。
- 7) 「ス」を使用せざる例で小脳に結核結節がある像、臨床的に髄膜炎の症状を示さず、髄液も異常なし。
- 8) 「ス」12g 使用例で第3脳室壁に級核級節ある像。
- 9) 「ス」53g 使用例で脳実質内に陳旧性。一部石灰化する病巣の像。髄膜は変化なし。粟粒結核経過中一時髄膜炎の症状を示したが間もなく消失した。髄液は終始正常。
- 10) 「ス」6.5g 使用例で G. cent. post の大血管が犯されている像。
- 11) 「ス」27.6g 使用例で中脳の小血管が犯されている像。
- 12) 「ス」40g 使用例で脳底動脈の内壁が肥厚している像。
一般に「ス」使用例は血管の変化が強い。
- 13) 「ス」12g 使用、脳実質の軟化巣を示す。
- 14) 「ス」57g 使用例で G. temp. sup. 附近の血管内の結核菌の集塊を示す。
- 15) Zehl-Haidenhain 染色で植田教授の青い菌は見付からない。

結核菌発育様式の考察、特に異論の因と成る看過せられた一つの事実に就て

植田三郎 (第7部)

ミコバクテリウム各菌型を供試し、キルヒナー液体培養基上の発育初期の菌膜を載物硝子に貼付した標本を、チール、ネールセン法及びチール、ハイデンハイン法で染色して、比較、検討した。動物の感染局処リンパ節の塗抹標本に上記同様の染色法を試みたものをも亦比較、対照した。

その結果から見れば、菌体中に抗酸性物質の出現する速さは、菌型の如何を問わず常に一定である。スメグマ菌及び鳥型菌の初期菌膜中に非抗酸性の菌体を見出し易いのは、これらの菌型の発育が速かである爲めである。併し人型菌は培養基上では非抗酸性の菌体を見難いが、これは培養基上では此種の菌型の発育が促進せられていないからである。人型菌と雖も感染動物の組織内では、或時期には極めて旺盛な発育をする。そのような時期には、染色標本中に多数の非抗酸性の菌体を見ることが出来る。

纏つて菌体個々の染色性を吟味すれば、1. 易染性にして非抗酸性、2. 易染性にして同時に多少とも抗酸性、3. 抗酸性、の三者に區別する事が出来る。而てチール、ネールセン法では、1. を非抗酸性に、2. 及び3. を抗酸性に染めるのに対して、チール、ハイデンハイン法では、1. 及び2. を易染性に、3. を抗酸性に染め出す。即ち易染性物質を持つ形を発育力を持つ菌体と見做し、それを唯單に抗酸性にのみ染まる菌体から區別しようとする見地からすれば、チール、ハイデンハイン法が妥当な事は明らかである。

要之、結核菌の形態及び発育様式を考察するに當つては、それぞれの菌型のその時その時の発育の緩急を先ず顧慮し、同時に染色方法を充分吟味する事が不可欠である。然らざる時は想わざる錯誤と混乱を來たす憂いがある。